

# 図書室月報

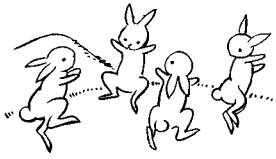
2020年(令和2年)9月5日

第688号

島田潤一郎著

## 『古くてあたらしい仕事』

石原 生子



突然ですが皆さんはこどもの頃、何になりたかったですか。電車の運転手、花屋さん、消防士……どんな未来の自分を思い浮かべていましたか。どんな職業をイメージしましたか。そして実際に、その仕事に携わるようになりましたか。

古くてあたらしい仕事。このタイトルを聴いて、どんな職業を想像されたでしょう。これはある青年が「ひとり出版社」を起こしてから現在に至るまでの出来事や思いを、ありのままに記述した一冊です。誰に出会い、どんなことを感じ、何を目指したのか。素直で奇をてらわない言葉がその様子を綴ります。

著者である青年が就職先について悩み苦しむところから、この本は始まります。同時に大切な人との別れが彼を襲います。様々な思いを経て、一人で出版社を立ち上げることを決意します。そして今、自分の決意を肯定し、未来を描きます。

「ぼくは具体的なだれかを思って、本を企画し、実際に紙の

本をつくる。というか、それしかできない。」

意を決して一人で出版社をつくるという挑戦が、常に光があたる道程ではなかったことも伺えてきます。少しひりひりするような切羽詰まった思いに圧倒されます。一方で、この人のつくる本を手にとってみたいと思わせる、実直な人柄が伝わってきます。

そもそも、働くとは何なのか。仕事とは何なのか。何かを指したとき、ひとは志に胸を躍らせ意気揚々と立ち上がります。そしてすぐに、その志が適当な鼻歌を歌っているのは叶えられないことに気づきます。

この本を読み終わったとき、何か心の中に芽生えてきました。考えると嫌になるような人生の疑問から目をそらさずに、素直な気持ちで自分の心と向き合うことができる気がしてきました。止まってはいけないと信じて全力で走ってきた砂利道。その脇に咲く小さな花に気づいて

立ち止まる勇気をそっとくれる古い友のような、そんな一冊だったので。

テレワークという働き方が当たり前になりつつある今、そしてこれから。私たちはどのような働き方をするようになるのでしょうか。自分の心がどこを指しているのか、そのためにどんなふうにも暮らしていくのかを読後からずっと考えています。

この本は、働くことだけでなく、生き方について、日々のあり方について、今一度向き合いなおすきっかけをくれました。

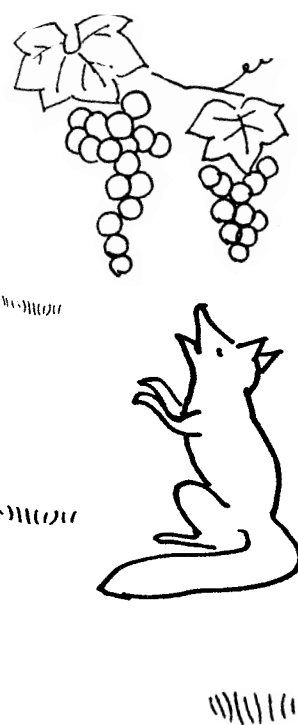
メディアは多様化しました。便利な媒体も良し。一方で、著者の言葉を活字にし、その活字を頁にし、その頁の束の重さを膝の上を感じる幸せは、本だけが静かに届けてくれます。そんな一冊の「本」という存在に改めて心が救われた気がしています。在宅時間がたつぷりある今だからこそ、書物を手に。「自粛中」ではなく「自分の大切な時間」に読んでいただきたい一冊です。

ブッククラブから

## 東山彰良 著 『流』

ーブッククラブに参加してー

飯塚 恵



今回、初めて「ブッククラブ」に参加しました。一つの作品について、講師の先生の解説や、他の参加者の感想を聞けるのが楽しみで、作者や作品については、「台湾生まれ」、「直木賞受賞」位の知識であまり情報を持たずに読み始めました。

当初、冒頭シーンだけがユーモラスで、退屈な懐古的青春群像劇かな…:… と思いつつ読み進めていきましたが、中盤になると狐火やら幽霊やらが出て来て、「サスペンスなの？ ホラーなの？ 世界観ブレブレじゃない」と批判しつつも、物語の中にグイグイと引き込まれてゆきました。私には見慣れない「渾名」(あだ名)「玉蘭花」(モクレン)等の漢字や、解釈に悩む表現に引っかかりを感じながらも、不思議

な魅力に頁をめくる手は止まりませんでした。一気に読み終え、まず感嘆したのは構成の素晴らしさ。読み手の関心や感情をあっちへこっちへと揺さぶりながら、テーマは一貫していたのです。地層の底にあるそれを、読み進める事で一層、一層、削り出してきたのだと最後に分かるのです。歴史の表舞台に現れない庶民の戦争の記憶。理不尽で、かっこ悪くて、被害者でありながら加害者で。そんな戦争の「みじめな姿」を、バランス感覚のある巧みな表現力で描いているなど感じ入りました。

講師の先生の解説で、作者のご両親は中国の方だとか、個人的なエピソードを備忘録的に綴った作品だと知り、独特な文章表現や豊富なエピソードに

得心がゆきました。実際のエピソードに基づいているから、狐火も幽霊もファンタジーやホラーではなく、アジアの雑踏の中にある日常の一部で違和感はないのだなど。

また、他の参加者の感想で印象深かったのは、怪我や暴力等の描写について、「凄惨過ぎて怖くて読めなかった」という方がいらした一方で、「この程度ではリアリティがない」という方がいらした事です。私は、凄惨な情景の描写に、狐火のファンタジー要素を緩衝材として加えて上手にバランスをとっているな…:…と思っていたのですが。

「リアリティがない」と感じた方は、「経験のない人には描けない」といった主旨のこともおっしゃっていて、そ

の言葉にハッとさせられました。私自身は、多くの方の被爆体験や空襲等の戦争体験談を直接聞いて育ったので、その恐怖や凄惨さをよく理解しているつもりなのですが、それは、まったく浅はかな思い上がりだと、その瞬間に突き付けられた気がしました。

「実際の経験」のあるなしで、一つの表現に対する感じ方の差がここまで大きいと分かり、もっと謙虚な姿勢で物事を見聞きしなければと身の引き締まる思いでした。

そして、年齢、職業、色々な人と同じ本を読み、感想を言い合える、ブッククラブって素敵だなと感じました。

(平凡社)

新着図書から

〔総記〕

公共図書館が消滅する日

薬師院仁志 (牧野出版)

016

〔哲学 心理学 宗教〕

孤独を生き抜く哲学

小川仁志 (河出書房新社)

141

日本仏教の基本経典

大角修 (KADOKAWA)

183

〔歴史〕

クリテイカル日本学

ガイタニデイス・ヤニス (明石書店)

210

日本史を学ぶための図書館活用術

浜田久美子 (吉川弘文館)

210

日本と世界の地理

砂崎良 (朝日新聞出版)

290

〔社会科学〕

日本人のためのイスラエル入門

大隅洋 (筑摩書房)

302

リビアを知るための60章

塩尻和子 (明石書店)

302

太平洋を渡った杉原ビザ

高橋文 (岐阜新聞情報社)

316

外交を記録し、公開する

服部龍二 (東京大学出版会)

319

不戦条約

牧野雅彦 (東京大学出版会)

329

介護保険が危ない!

上野千鶴子 (岩波書店)

364

マイホームの彼方に

平山洋介 (筑摩書房)

365

女子学生はどう闘ってきたのか

小林哲夫 (サイゾー)

367

ひきこもりのライフプラン

斎藤環 (岩波書店)

367

3・11を心に刻んで 2020 岩波書店編集部 (岩波書店)

369

私たちはふつうに老いることができない

児玉真美 (大月書店)

369

10年目の真実

増井祐介 (きょうざれん)

369

障害のある子の住まいと暮らし

渡部伸 (主婦の友社)

369

国家と教育

中嶋哲彦 (青土社)

373

音楽文化戦時・戦後

河口道朗 (社会評論社)

375

鉄筆とピラ

都立立川高校「紛争」の記録を残す会 (同時代社)

376

成人教育・生涯学習ハンドブック

ピーター・ジャーヴィス (明石書店)

379

今日から使えるワークシヨップのアイデア帳

ワークシヨップ探検部 (翔泳社)

379

フテンマ戦記

小川和久 (文藝春秋)

395

〔自然科学〕

激甚気象はなぜ起こる

坪木和久 (新潮社)

451

あしたの地震学

神沼克伊 (青土社)

453

知っておきたい日本の絶滅危惧植物図鑑

長澤淳一 (創元社)

470

〔工業〕

生き続ける水俣病

井上ゆかり (藤原書店)

519

おかずの基本

主婦の友社 (主婦の友社)

596

珈琲のすべて

(榎出版社)

596

〔芸術〕

高峰秀子の反骨

高峰秀子 (河出書房新社)

778

香の文化史

松原睦 (雄山閣)

792

〔言語〕

振仮名の歴史

今野真二 (岩波書店)

811

〔文学〕

ビジュアル資料でたどる文豪たちの東京

日本近代文学館 (勉誠出版)

910

万葉集愛の100首

中西進 (宝島社)

911

小津安二郎の俳句

松岡ひでたか (河出書房新社)

911

ひこばえ 上・下

重松清 (朝日新聞出版)

911

ぼくが13人の人生を生きるには身体がたりない。

haru (河出書房新社)

918

絆創膏日記

東田直樹 (KADOKAWA)

918

韓国・フェミニズム・日本

イ・ラン (河出書房新社)

921

無の国の門

サマル・ヤズベク (白水社)

921

わたしはナチスに盗まれた子ども

イングリット・フォン・エールハーフェン (原書房)

931

今日のわたしは、だれ?

ウェンディ・ミッチェル (筑摩書房)

931

〔一節〕

佐野典代著

『ものがたり  
茶と中国の思想』

「三千年の歴史を茶が変えた」



まだ人が踏み込まない、木々の枝はもつれ、触れ合う葉は、氷のかけらと連れ添って吹いてくる冷たい風にはばらばらと音を立て、西の月が空の色に溶けて、早朝の光が、輝く玉のようにこぼれ落ちる。顧渚山山中を、陸羽(？)は茶の木を探して歩いていく。

遠くから眺めると、丸まった女の背中のようなおっとりとしたこの山で、中国最初の名茶「紫笋茶」と「陽羨茶」が発見されたという話が、世界最初の茶の本『茶経』に出てくる。著者は、後年茶神と言われる陸羽だ。

顧渚山に育つ茶の新芽は紫色、葉の形はタケノコのようなので、紫の笋の葉という印象が、茶の名前になった。陸羽が最初に出会ってしまった茶が、現在なお緑茶の王者の座にあることからして、陸羽は茶に取り憑かれる運命の持ち主であったのかもしれない。

「この茶を皇帝に飲ませたい」  
杭州の、ときの長官に提案した陸羽のこのひと言が、皇帝献上茶を誕生させることになった。

(平凡社)

図書室のつどい

「自分だけの答え」が見つかる  
『13歳からのアート思考』

お話 末永 幸歩

(美術教師/東京学芸大学個人研究員)

／アーティスト

子どもの頃には誰もがもっていた「自分だけのもの」の見方・考え方を、皆さんは失っていないでしょうか？もしかすると、答えや正解を追い求めるような現代の教育により、気がつかないうちに私たちの視野は狭くなっているのかもしれない。

本書はそんな私たちの目を覚まし、新たな方向へ成長するきっかけを与えてくれます。今回は著者をお呼びして、今注目目の「アート思考」についてお話しいたします。アート作品を通してエクササイズを実際に体験し、「アート思考」を深めることで自分の前に新しい道がどんどん増えていくような感覚を皆さんも味わってみませんか？

〈末永さんの本〉

『13歳からのアート思考』(ダイヤモンド社)

とき 10月3日(土) 昼2時〜4時

ところ 公民館 地下ホール

定員 40名(申込先着順)

申込先 9月18日(金) 朝9時〜

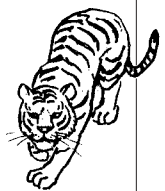
公民館 ☎(572)5141



\*新型コロナウイルス感染拡大防止のため、状況により中止とさせていただきます。

〈私の本棚から 第6回〉

中島敦著 『山月記』



大久保 芽衣

「我が臆病な自尊心と、尊大な羞恥心の所為である。己の珠に非ざることを懼れるが故に、敢えて刻苦して磨こうとせず、又、己の珠なるべきを半ば信ずるが故に、碌々として瓦に伍することも出来なかった。」

高校時代、授業で山月記を学んだ時、私はこの李徴の言葉に安直に共感した。プライドばかり肥大え太らせ、中途半端な才能に縋り付き摩耗していく様子に、私自身がびったりと重なるような気がしたからだ。

「李徴の気持ちが分かる」と言った私に先生は言った。「まがりなりにも李徴は科挙合格まで上り詰めたエリートだ。エリートの苦悩が(凡人の域を出ない)お前に分かるのか」と。今なら少し分かる気がする。自分の気持ちを簡単に他人の言葉で取って代わらせて分かった気になるなど。自分自身の言葉で自分を物語れど、先生はそう言いたかつたのではないだろうか。

李徴の渾身の詩に対する袁孝の批評を思い出す。「成程、作者の素質が第一流に属するものであることは疑いない。しかし、このままでは、第一流の作品となるのには、何処か(非常に微妙な点に於て)欠けるところがあるのではないか」。李徴の致命的な部分、それは詩を作ることで自体が、あるいは詩をもって成り上がる事が目的となってしまうことだと思ふ。そこに内側から迫り上がってくるような衝動やこれを表現しなければと突き動かされるような使命感は無い。そこだ。私は李徴のそうした部分に自分との共通点を見

たのだ。どこまでいっても彼の世界には彼しかおらず、自分が気持ち良くなることしか考えていない。空っぽな自分に気付きつつも、そんな自分を許せず、取り繕って理由付けして納得することは上手くなっていく。虎となった李徴が放った咆哮の混じった詩。それは、人という柵を捨て、獣のように内なるものの衝動に任せて思いを解き放った瞬間だった。自尊心も羞恥心も無い獣に成り果てたからこそ、李徴が自分を力強く物語れた瞬間だったのだ、きっと。

これが私の最後の図書紹介だ。自分が残してきた文章が恥ずかしくて堪らない。言葉にした途端に自分から離れていく。胸倉を掴んで、「お前は誰だ」と叫びたい。分かって欲しいという気持ちとお前に何が分かるという気持ちがぐしゃぐしゃに混在して頭を掻きまわりたくなる。それでも、それでも自分で物語ることだけに拘ったつもりだ。教えて欲しい。私は、借りものではなく自分の言葉で語っていたのだろうか。(新潮社)

くにたちブッククラブ

—空間を超えて世界と向きあう文学—  
井上靖『敦煌』(新潮文庫)

講師 大木 志門 (東海大学・日本近代文学)  
とき 9月10日(木) 夜7時半〜9時半  
定員 30名  
(今年度すでに申込済の方は申込不要)  
ところ 公民館 地下ホール  
申込先 公民館 ☎(572)5141



\*次回は10月8日(木)  
柴崎友香『わたしがいなかった街で』  
(新潮文庫)です。